

NO.129

# 国内宣教



## 新シリーズ「国内宣教スピリット」① 『一億二千万宣教』を『キリスト教世界観』に 立って

常任書記 広瀬 薫  
ひろせ かおる



「われわれは、伝道と社会的責任とを互いに相容れないものともみなしてきたことに對し、懺悔の意を表明する」(ローザンヌ誓約)

「一億二千万宣教」とは、何を指す標語でしょうか。日本に生きる全ての人々にイエス・キリストの救いの福音を宣べ伝えるとは、何を内容とするのでしょうか。

それは「人の魂に救いをもたらすこと」だけでなく、「人の救いを通して世界を完成に向かわせること」を含んでいます。この点を余りに狭く理解して来たことを、1974年のローザンヌ誓約は悔い改めましたが、以来30年を経た今、世界は国家主義や経済主義の下にますます歪み、「命」はないがしろにされ、本来の姿に活かされない被造物は「うめき」(ローマ8章)つつ「神の子どもたちの現れを待ち望んで」います。

この時代私たちは、「聖書的な世界観」(歴史観、人生観、価値観の枠組み)を明確に踏まえ、いわゆる「キリスト教世界観」に立った宣教を展開することが大切だと思っています。言い換えれば、神の「創造」、人間の「墮罪」、キリストによる「救済」、世界の「完成」(終末)という4ポイントを枠組みとした伝道です。

具体的に言う例え、福音の提示を従来伝統的には「神―罪―救い」の3ポイントか、あるいは「信仰」を加えた4ポイントで行って来たのだと思います。これに終始する伝道方法ですと、教会とキリスト者は世を革新する力を持ち得ないと思えます。なぜなら「信仰を持って救われたあとの生き方」のビジョンを何も語っていないからです。日本の教会は「どのようしたら救われるか」を大変良く教えてくれますが、「救われたあとのように生きて行くのか」をなかなか教えてくれない所だと思えます。そこに弱点の一つがあると感じます。つまり「キリスト教世界観」の4ポイントで言う

と、「創造」とそれが指し示す「完成」への射程が弱いのです。これは一種の「現代的グノーシス主義」(世の本質を「悪」と見る傾向)ではないかと危惧します。そのために「日本のキリスト教徒は妥協した二重生活をしている」(遠藤周作)と言われる状況や、多くの「教会を離れた信仰者」を生み出す結果を招いていると感じています。

新しい信仰者へに「聖書」や「教会」や「ディポジション」が教えられても、それだけでは信仰生活は個人的・教会内のな次元に限定されて行くのではないでしょうか。

さらに「創造」と「完成」に基づいて、「仕事・世での奉仕」や「家庭・子育て」や「社会・経済」や「国家・政治」への姿勢を教えられれば、キリスト者は「週日の意義深さ」に目が開かれるでしょう。そして聖書的に一貫した世界観に立って、人生に前向き・積極的・肯定的に取り組む視座を得るでしょう。今「一億二千万」が、人を本当に活かす命をもたらす福音の「宣教」を待っているの(多磨教会牧師)

NO.130

# 中国内宣教



## シリーズ「国内宣教スピリット」② 「『全県』で『犠牲』を」

常任書記

ひろせ  
広瀬 薫



ほかの町々に  
も、どうしても  
神の国の福音を  
宣べ伝えなければ  
なりません。

ルカ4章43節

「1億2千万宣教」を展開するために掲げている「全県に同盟の教会を」とは、何を意味しているのでしょうか。これを「同盟の覇権主義」のように言う意見を聞いたことがあります。しかし以前伝道部で教会開拓の実際を知って来た筆者の感想を言えば、これは実感からかけ離れた見解だと思えます。

●開拓伝道は、どの地域で行っても犠牲の多い働きです。もし覇権を目指すのならば、与えたり犠牲を払う株分けや開拓など考えずに、ひたすら既存教会の拡大を目指して「与えずに受ける」方が理にかなっていると思います。しかしそれは聖書の教えではなく、仮にそれで教会教団が大きくなっても、神様に喜ばれはしないでしょう。同盟教団は主に喜ばれることを目指しているので「犠牲を惜しまない宣教の姿勢」を掲げて

全県への伝道に取り組んでいるのだと思います。

●前号に「キリスト教世界観」に立った「1億2千万宣教」を書きました。「救霊」に終わらず、「創造」から「完成」に至る視野が大切です。キリストの十字架と復活は、全世界を完成する包括的な力を持っています。

ではその完成への歩みは、どのようなに進められるのでしょうか。それは「十字架を担ってイエス・キリストについて行く」実践によってです。それを筆者は「贖罪の実践」と呼んでいます。

●今の世界は正反対の原理が支配しています。自ら犠牲を払わずにそれを他者、特に弱者に押しつけて「勝ち組」を目指す姿勢です。それは人も家庭も仕事も社会も本当には活かさない、聖書が言う「死」の状態です。そこに「命」をもたらず大切な実践原理を、私達は「霊的、人的、財的に犠牲を惜しまない」宣教協力理念として持っているのです。

●すると「全県に同盟の教会を」の意味は、「同盟教団は、全県で犠牲を払

うつもりだ」となるでしょう。あるいは「全県で十字架を担いた」と言っても良いでしょう。

事実、同盟教団の今までの拠点伝道の歩みを振り返れば、それは関西以西の全ての教会にとっても、北海道や東北の教会にとっても、多くの実りを「与える」ものとなって来たと思います。その背景に、現地で担当者を初め関係者が担った多くの「犠牲」があり、またそれを単なる「人間的労苦」に終わらせず、「贖罪的」に命をもたらず働きとして用いて下さった神様の恵みがあったことを思います。筆者自身、東北の開拓が、いかに先行教会にも他教団にも、望まれ、喜ばれ、祈られ、協力を得て実現して行ったかを見、嬉しい経験を致しました。

今や残る「未設置県」は、客観的データによれば、いわゆる「伝道困難県」ばかりです。同盟教団の覇権意識を心配するよりも、伝道困難な地域の犠牲は他に任せて自分は手を出さないのかという心配をした方がいいと思います。神の国のための「犠牲」を「全県」に払いたいものです。

(多磨教会牧師)

# シリーズ③ 『点から線へ』は教会に必須の霊性

常任書記 広瀬 薫  
ひろせ かおる

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

マタイ18章20節

国内宣教の3つの標語、最終回は「点から線へ、線から面へ」の意味を考えます。

●これは同盟教団の「3本柱」の一つ「宣教協力」と深く結びついていきます。ある県の宣教を担う教会を孤立させず、一つまたは二つしか教会がない県にはもう一つ開拓して、教会の交わりと宣教協力を身近に形成して行くことを目指すわけです。「全県に」は手段であって目的は「1億2千万宣教」ですから全県を目指すと共に、交わりと宣教協力の網が全国を覆うようにする開拓も同時進行で進める必要があります。実際にはこの両者は重なります。例えば、東北への開拓(宮城や岩手)は、「全県」を目指す働きであったと同時に、遠隔地に先行していた教会

(青森)の孤立を防ぎ、広大な東北に線を、そして面を形成する働きであったと言えます。

●この「点から線へ、線から面へ」は、宣教の戦略というよりも、深い聖書的な意義を持つていると思います。聖書は宣教の働きを、本質的に協働性の中で担われるものと描いていると思われるからです。

イエス・キリストは、弟子達を宣教の働きに派遣する時、「ふたりずつ」遣わしました。「使徒の働き」で展開される宣教の働きの多くも、チームによつて担われています。(パウロとバルナバ等)これは大変示唆に富んだことです。私達は、教會的な宣教の業を考える時、一人でする方がやりやすいと考え勝ちですが、実はイエス・キリストは「ふたりでも三人でも」という交わりの中に臨在すると約束していることを覚えていただくものです。そこにこそ「キリストの身体」としての教会が存在する

のです。

これを思うと、「点から線へ、線から面へ」の原理は、実は各個教会の中でこそ、実現したいものだと思います。「一教会一牧師」というプロテスタント教会の慣行は、聖書的ではないのだと感じています。教会の働きは、本質的に協働性の中で担われるとすれば、教会は規模に関係なく、複数教会や宣教師との協力を必要とするのでしよう。もちろん教職だけでなく信徒も、牧師と共に教会内の「線」や「面」の形成に活躍するのが健全だと思えます。

●ヒットラーは著書の中で、「協力」は期待に反して活動を弱めるものだと喝破しています。協力は弱者を強めず、むしろ強者を弱めるのだという彼の議論にはそれなりの説得力があります。確かに、自己完結できる能力のある者には、協力が苦勞するよりも、単独行動の方が力を発揮しやすいように思われるでしょう。しかし聖書は全く違う協働の霊性を教えていることを覚えていたいと思います。「被造世界の完成」を目指す私た

ちは、この世の競争と淘汰・強者優越の価値観に流されず、互いを生かし合う愛に結ばれて、「点」ではなく「線」や「面」が組み合わさった「ひとつのからだ」である教会形成を目指したいものだと思います。

## 「宮崎市(南九州)開拓」伝道者公募

宮崎開拓伝道者公募を

教団の定期便5月便に同封、  
世界宣教大会のパンフレットに掲載しました。  
ご覧になり、お祈りください。

窓口：伝道局長岡山敦彦まで。

093-961-1960 (小倉中央教会)